

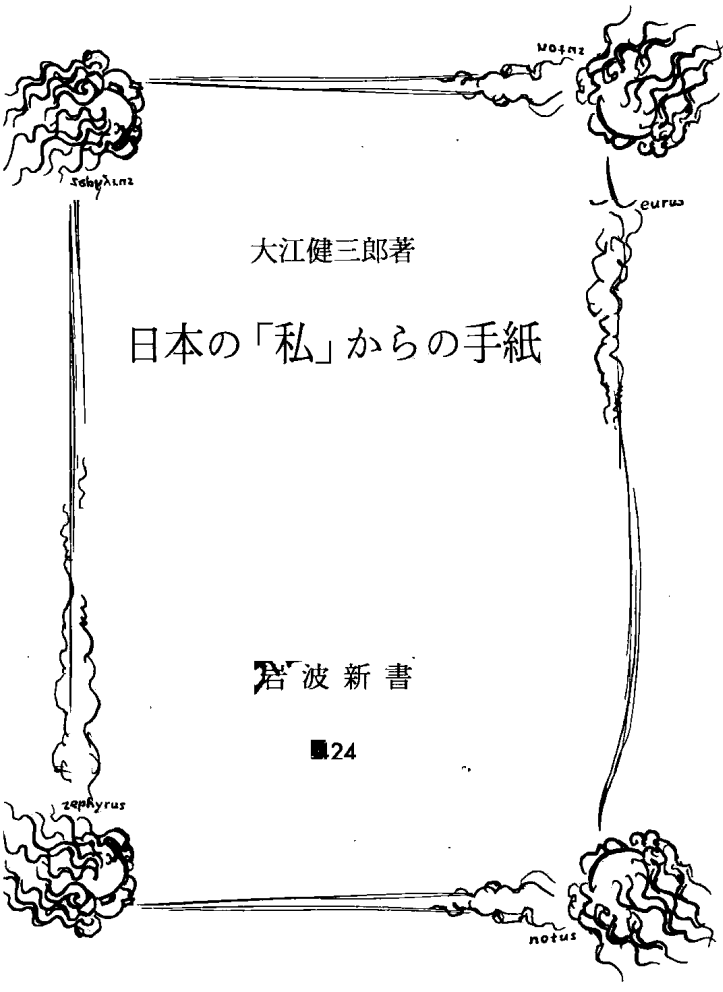
大江健三郎著

日本の「私」からの手紙



岩波新書

424



大江健三郎著

日本の「私」からの手紙

岩波新書

■24

大江健三郎

1935年 愛媛県に生まれる

1959年 東京大学文学部フランス文学科卒業

現在 作家

著書—小説「M/Tと森のフシギの物語」
「キルプの軍団」「治療塔」「治療塔
惑星」(以上、岩波書店)

「個人的な体験」「万延元年のフット
ボール」「同時代ゲーム」「雨の木」
を聴く女たち」「新しい人よ眼ざめ
よ」「懐かしい年への手紙」「人生の
親戚」「静かな生活」「燃えあがる緑
の木」など

エッセイ「ヒロシマ・ノート」「沖
縄ノート」「新しい文学のために」
「あいまいな日本の私」(以上、岩波新書)
「核の大火と「人間」の声」「小説の
方法」「人生の習慣」「新年の挨拶」
(以上、岩波書店)

「恢復する家族」など

日本の「私」からの手紙

定価はカバーに表示してあります 岩波新書(新赤版)424

1996年1月22日 第1刷発行

著者 おお え けんざぶろう
大江健三郎

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・田中製本

© Kenzaburo Oe 1996

ISBN 4-00-430424-5

Printed in Japan

目次

フランス核実験をめぐる手紙と感想	1
天皇が人間の声で話した日	23
日本人はアジアで復権 リハビリテイト しうるのか	39
希望と恐れとともに	51
日本人は年とともに改良されたか	71
ギュンター・グラスとの往復書簡	89

信仰する人たちもそうでない私らも	139
平和への文化のために	167
時代から主題をあたえられた	183
後記	213

フランス核実験をめぐる手紙と感想

|||||||

初心のファクス

|||||||

このひとつきほどの間に、私は強く自分を縛るものになるはずのファクスをふたつ送った。若い文学者に時代遅れをからかわれながら、私は昨年末までファクスを持っていなかった。襲いかかってきた通信の洪水にパニック状態の私の家族を見かねて、友人が海外からの連絡に無償で代行を申し出てくれた。その友人とつなぐパイプとして、はじめてファクスは私の家に来て来た。

——かれは、じつによく働くなあ！ と、私はこの機械への敬愛をいくたび家内に語ったことだろう。

したがって、たまに友人を介さず自分で海外へファクスを送る時には、緊張して、不安ですらある気持ちになる。しかも送信の原稿は手許に残ると、先方に受信されたかどうか気がかりなままなので、心の揺れとともに私は機械の前に立ちつくすことになる……

さて、私が送ったファクスの第一は、いまアメリカで亡命生活をおくっている中国の作家、鄭義テヨンイにあてたものだ。私はストックホルム演説（あいまいな日本の私）にも、この『古井戸』の作家の名をあげた。かれは生活の困難と闘いながら——お子さんの誕生という喜びもあったのであれ——新しい長篇を書きつつ、天安門事件以後つづく、中国政府の知識人弾圧に抗議する運動を続けている。

国連の「寛容年」にちなんでも共産党の上層部に政治的寛容をもとめた、王丹ら中国の知識人たちの署名者は、この五月以来さらに弾圧されている。「中国人権」とともにかれらを支持してヨーロッパ、アメリカに始まった新たな署名運動に、参加するファクスを私は送ったのだ。

それにさきだって「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」に書いたことだが（本書「日本人はアジアで復讐リハビリティしうるのか」）、私は日本が中国にしっかりした謝罪と補償を行なわないことが、現在および未来の中国の進み行きについて、日本人としてまともな勧告をなしえない理由だと思ふ。アジアにおける環境破壊について、いまもっとも大きい鍵をにぎっている中国へ、その人権弾圧についてとともに、日本政府と知中派の知識人は、つねに及び腰である。もとよりそれは、近い歴史において中国人にしたことを忘れたふりする連中の居丈高さにくらべれば、ず

っと己れを知る態度である。しかし、本気でアジアへの侵略責任を認め、償^{つぐな}うことをすれば、日本人はわれわれ共通の未来のための環境と人権について、この巨大な隣国に心からの忠告を行なう資格を持つのではないか？　そしてそれはいかにも緊急に必要なことだ。なぜなら、中国の核実験は未来の環境と人権について最大の挑戦だから。アジアの国々に対して歴史の責任をとることと、経済制裁をふくめて中国の核実験への現実的な行動に出ることは両立する。あわせてアメリカの核体制をアジアにおいて補完するのをやめる方向に進み出るなら、さらに。

私が発信した第二のファクスは、直接に核実験をめぐるものだった。こちらはフランスのシラク大統領が傲然^{ごうぜん}と計画を語る太平洋での核実験に関わって、すでに「ル・モンド」紙のインタヴューでのべた主旨のものだ。もっとも、大統領府にファクスを送ったのではない。私は南仏の美しいエクサン・プロヴァンス——美しい、と書いたのはこれまで文学で親しんできた知識によるもので、同行するはずだった家族も、絵画と音楽をつうじてそれぞれにそこが来てきた——でこの秋に開かれる、日本文学を特集した大きい催しへの参加を取り消したのである。

それは文化省や地方自治体の援助こそあれ、民間の団体による「本^{シチ・デューリール}の市」で、オクタヴ

イオ・パスを中心にした中南米文学の特集など、すばらしい実績がある。今回出席を予定されている日仏の文学者の名簿を見るかぎり、最上の人選だともいいたい。加えて、私がこれまでお世話になり、深い友情をいだいてきたフランスの日本文学研究者の名も、ひとりならず見出すのである。送信を終えて、機械から出て来る自分の原稿を読みなおしながら、この深夜、私がそこに立ちつくしている時は永かった……

素人^{アマチュア}の読み手としてであるけれど、私はフランス文学に自分の文学を決定された人間である。生涯の師匠は、フランス・ユマニスムの寛容と、「人間が思い込みの機械になりやすいこと」を終生説きつづけた学者だった。

私はフランスの一連の核実験の計画が、冷戦後の世界構想の——その中心に置かれるべきものとして核軍縮がある——明るみの見えた展開に逆行するものだと思う。実験後、包括的核実験禁止条約に署名する、とシラク大統領はいう。それはつまり、かれの署名する条約のすぐにも露呈するだろう無効性を、この条約の外にある、核使用のおそれが実際にある小国に、また核優位に専念する条約参加の大国に、あらかじめ確言することだ。

エクサン・プロヴァンスの「本の市」への一方的な違約行為によって失うはずの友人たちを思っ
て悲しみつつ、しかし自分がフランスの文明精神から学んだもっとも大切なもの、あらゆ

る軍事威嚇を無化しうる寛容を思い、人類を絶滅させうる思い込みの機械への抵抗をめざして、ひとりの無力な日本人がファクスを操作していたのだった。

——一九九五年八月二十一日、「読売新聞」

|||||||
大地は煙り、鳥たちの歌はない
|||||||

私はフランスが九月から再開しようとする核実験に異議を申し立て、南仏エクサン・プロヴアンスで開かれる芸術祭への参加を取り消しました。主催の民間団体に対しては一方的な違約となる自分の行為について、傷つけた善意の人たちに償うことをしなければなりません。また、この意思表示が広く報道されたことから個人として引き受けねばならぬ社会的責任についても、無力は承知していますが、これまでやってきたことの持続の上でこたえるつもりです。

さしあたって書きたいのは、フランス人のジャーナリストや日本文学研究者たちからの、ユマニスムの文化伝統を思い出させる寛容な励ましと、日本人の国際政治学者——のある部分——による批判の落差に呼び起こされた思いについてです。

この惑星に核軍縮への現実的な勢いが生じたのは、一九八二年、「核の冬」を警告する言葉が抵抗しがたい説得力を持った時からでした。つまり、核戦争が北半球の、ひいては全地球の環境の破壊をもたらす、というシミュレーションがなされて以来のこと。続いてソヴィエトの崩壊があり、「冷戦後」が現実のものとなって、世界核戦争の恐怖は遠ざかったと広く受けとめられることになりました。

この展開のなかで、しだいに私が不思議な思いを強めてきたのは、こういうことです。今なお核兵器はあまりに過剰に実在し、核軍縮のスタートというべき長距離戦略ミサイルの大幅削減すら、二十一世紀に入ってはじめて成果があがるという進み行き。それでいて、なぜこうもあっさりと「核の冬」の恐怖が人びとに忘れ去られてしまったのか？

私は「核の冬」が指摘されるやいなや素早く反応したジョージ・ケナンの、論文や講演を再読したものでした（『The Nuclear Delusion', pantheon, 1982）。そこには私のようにナイーヴな素人が、いまになってこそ思いあたる大切なことが語られていたからです。たとえば、大国民の核政策は、《われわれが大きい権力の国家の外交に期待する成熟と明識のしるしではなくて、大政府の知的な原始主義と許しがたい単純素朴のしるしである。私はあえてナイヴティーとい

う言葉を使う。なぜなら無垢のナイヴティーがあると同じく、シニシズムと疑惑のナイヴティーもまたあるからだ。》

現在、シラク大統領が現わしている特性こそ、まさにそれではないでしょうか？ わが国の学者は、自分がフランス人なら、アメリカの「核の傘」のもとにありながら日本人は核実験に反対するのとかからかうだろう、といいました。

「核の傘」という言葉のひそめている大国中心主義への、やむなくその危険のもとに押し込められた小国側からの吟味^{ぎんみ}を忘れた談論ですが、われわれがアジアの非核化という具体的目標をめざさず、ただフランスの核実験を批判するのみであるなら、確かにこのからかいはあっているでしょう。

ケナンは《中央および北ヨーロッパの完全な非核化》を具体的なプログラムとしてあげてくれたのでした。現在それは東ヨーロッパを加えてすらも、実現可能なプランではないでしょうか？ 私はフランスがこの核軍縮へのイニシアティブに逆行していることを、もっとも悲しむのです。もとより日本はアジアの非核化への構想を深めねばなりません。その上でなら、さきの政治学者のシニシズムと疑惑のナイヴティー、それに加えてかれの「核の傘」観の怠惰な古めかしさをいうことは十分できると思います。

いま右の論点をケナンから引用したのは、積極的な理由もあるのです。この八月、ワイツゼッカー前ドイツ大統領が訪日された機会に、氏の話を幾つものレベルで聞くことができました。そして、とくに私が魅力を感じたのは、いまやドイツやフランスはそれぞれの国家理性レゾン・デタによってではなく、ヨーロッパ理性という共通の根拠を持つ、という主張でした。そして私は、もしヨーロッパの理性がひとつの力として働き始めれば、中央および北、東ヨーロッパの完全な非核化は可能であり、それこそ世界的な「冷戦後」の核軍縮を先導するもの、という希望をいだいたのです。しかし、先々週のこと、ドイツ政府は、フランスの核抑止力が欧州連合(EU)全体のために有効だと評価したのでした。

この五月、イギリス南西部のウェールズを訪ねた私は、この独特な地方の民族、言語、環境の運命を憂えてきた老詩人R・S・トーマスを集中して読み始めています。この文章のタイトルもかれの一節。永年つとめてきたウェールズの国教会牧師を隠退してから、反核運動に力をそそぐことになったトーマスは、自己の生涯の営為をしめくくる態度をこう表現しています。《人間は所詮滅しよせんびるものかもしれない、残されるものは虚無だけかもしれない。しかし抵抗しながら滅びようではないか。そして、そうなるのは正しいことではない、というようにしよう。》

これは、実はフランス十九世紀の文人セナンクールの言葉なのです。そしてわが国では仏文学者渡辺一夫が日本の知識人の常識としたいと、しばしば引用したものでもあります——訳も先生による——。それをあらためて自分の覚悟ともしつつ、シラク大統領の核実験に抗議することが、フランスの歴史に根ざしたユマニスムと、なお現にそれを生きているフランスの市民への敬愛に矛盾するとは思いません。同時にそれはわれわれに、アジアの非核化の課題をリアルにつきつけなおすことにもなるでしょう。そこで私は中国の人権抑圧と核実験に抗議することに始めて、個人としての責任のはたし方をさぐっています。

——一九九五年九月四日、「朝日新聞」夕刊

フランス、傷だらけの実験

フランスの核実験は、しだいにこの国の支配層と軍部の頑迷——それは寛容とは逆のもの——をあらわにして開始されました。ムルロア環礁での、グリーンピースをはじめとする抗議運動へのテレヴィ会見をしたシラク大統領の反発は、核を持つ大国の反省のなさ、その底にある追いつめられた思いとともに示していました。フランスは傷だらけで実験をはじめたので

す。九六年五月まで、この抗議が続く、ということに大きい意義があると思います。

核兵器が、戦争を民衆レヴェルからひとにぎりの戦略家レヴェルのものへと「反動化」させた、といったのはフランスのサルトルでした。いまムルロア環礁から勇敢に発信されているのは、それへの反対があらためて民衆レヴェルのものでありうる、ということです。

「核の冬」が地球の全環境を滅ぼす、という事態は、いまなお変わっていません。どうしてもそれが忘れられつつあるのか？ 「冷戦後」という希望が、なし崩しになってしまおうとしているのに、どうして平気でいられるのか？ 「核の傘」というものが大国の安全のためにわれわれの生命を人質にさし出すことであるとよく認識していたはずじゃないのか？

こうしたことを、ムルロア環礁での抗議運動があらためて私たちに問いかけています。タヒチ島の住民の静かな祈りはもっと深いところで、明日の地球の健康に核が「良い」か「悪い」かをさぐりもとめてもいるようです。中国の核実験、アメリカの「核の傘」をふくめて、私たちがひとりひとりその問いかけに答えてゆかねばならないと思います。これからの不安な九月、それを考え、話し合いつつければ、アジアの非核化という私たちの最大の課題にも日本人のコンセンサスが見えてくるのではないでしょうか。

——一九九五年九月六日、「読売新聞」夕刊

核時代の節度と正義

敬愛するクロード・シモン、あなたはシラク大統領の核実験への日本の市民の、またとくに私の感情と行動について、ともに反仏のカテゴリーのものとして受けとめられています。それを大國フランスの栄光に慣れた精神の過剰反応と批評するより、私はなおあなたに日本が遠すぎるための事実に関した解釈だと、切実な悲しみとともにうったえます。

私が南仏のシンポジウムへの出席を取り消したことについて、あなたは『私の国への敵意を十分不作法に示す』もの、と書かれました。自分の行為が不作法であったことを、私は恥とともに認めます。

それにもかかわらずエクサン・プロヴァンスの主催者たちが示された寛容に、私は自分のフランス文学研究の恩師が終生説きつづけたフランス・ユマニスムの今日に生きている伝統を見ました。

かれらにたいして、またシンポジウムが中止されたことでフランスの市民たちと核実験について直接語る意図がむなしくなった同僚たちにたいして、私は償わねばならぬと考えています。